

PRML4.1-4.2

@masa_kzm

4章 線形識別モデル

4.1 識別関数(判別関数)

- 4.1.1 2クラス
- 4.1.2 多クラス
- 4.1.3 分類における最小二乗法
- 4.1.4-4.1.6 フィッシャーの判別
- 4.1.7 パーセプトロン

分類問題

分類の目的は、ある入力ベクトル x を K 個の離散クラス C_k の1つに割り当てること

入力空間は**決定領域**に分離される

決定領域の境界を**決定境界**または**決定面**と呼ぶ

線形識別モデル

決定面が、入力ベクトル x の線形関数であり、 D 次元入力空間に対して、その決定面が $D-1$ 次元の超平面で定義される。

目的変数

2クラス分類

2値表現

クラス C_1 を $t=1$ 、クラス C_2 を $t=0$ で表現する。

$$t \in \{0, 1\}$$

多クラス分類

1-of-K符号化法

例えば、 $K=5$ クラスの場合、クラス2のパターンは

$$\mathbf{t} = (0, 1, 0, 0, 0)^T$$

分類問題に対するアプローチ

識別関数 4.1章

- 入力ベクトル x から直接クラスを推定する識別関数を構築する。

確率的識別モデル 4.3章

- 条件付き確率分布 $p(C_k|x)$ を直接モデル化する。

確率的生成モデル 4.2章

- クラスに対する事前確率 $p(C_k)$ とともに、
クラスで条件付けられた確率密度 $p(x|C_k)$ を考え、
ベイズ定理より、事後確率 $p(C_k|x)$ を求める

分類問題に対するアプローチ2

一般線形化モデル

$$y(\mathbf{x}) = f(\mathbf{w}^T \mathbf{x} + w_0)$$

分類問題では、領域(0,1)の値をとる事後確率を予測したい

fは活性化関数

決定面は $y(\mathbf{x}) = \text{定数}$ に相当し $\mathbf{w}^T \mathbf{x} + w_0$ が定数となる。つまり、関数fが非線形でも、決定面はxの線形関数である。

4.1.1 識別関数

線形識別関数 $y(\mathbf{x}) = \mathbf{w}^T \mathbf{x} + w_0$

w は重みベクトル、 w_0 はバイアスパラメータ。
 $-w_0$ はしきい値パラメータと呼ばれる。

$y(\mathbf{x}) \geq 0$ ならば、入力ベクトル \mathbf{x} はクラス C_1 に割り当てられる。
それ以外は、クラス C_2 に割り当てられる。

決定境界は、 $y(\mathbf{x})=0$ で定義される。

D次元入力空間中のD-1次元超平面に対応する。

決定面の性質

決定面上にある \mathbf{x}_A と \mathbf{x}_B を考えると下の式が成り立つ。

$$y(\mathbf{x}_A) = y(\mathbf{x}_B) = 0,$$

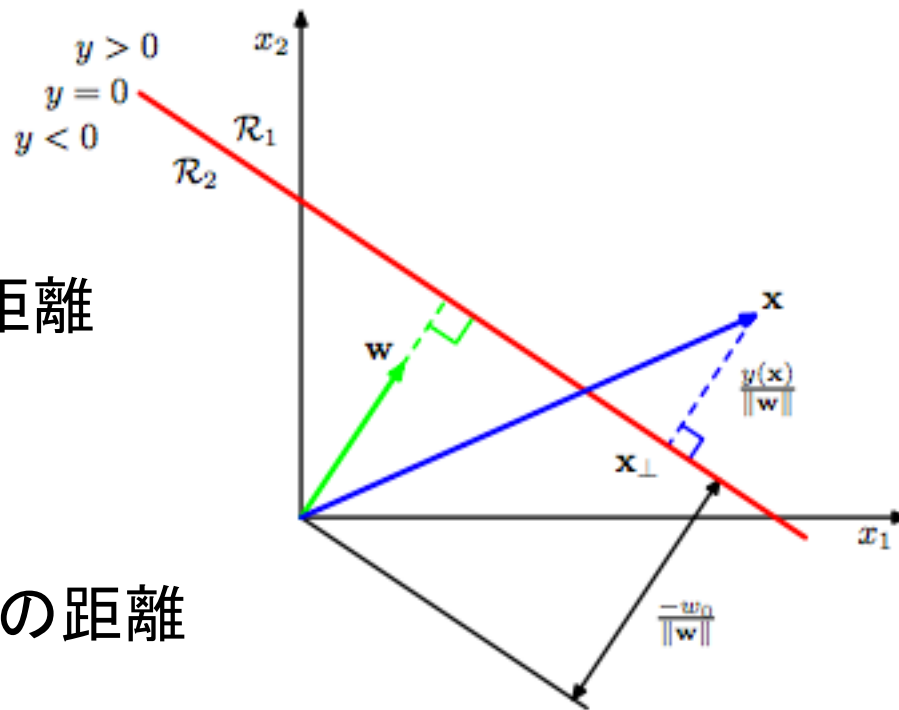
$$\mathbf{w}^T(\mathbf{x}_A - \mathbf{x}_B) = 0$$

原点から決定面までの距離

$$\frac{\mathbf{w}^T \mathbf{x}}{\|\mathbf{w}\|} = -\frac{w_0}{\|\mathbf{w}\|}$$

任意の \mathbf{x} から決定面までの距離

$$r = \frac{y(\mathbf{x})}{\|\mathbf{w}\|}$$



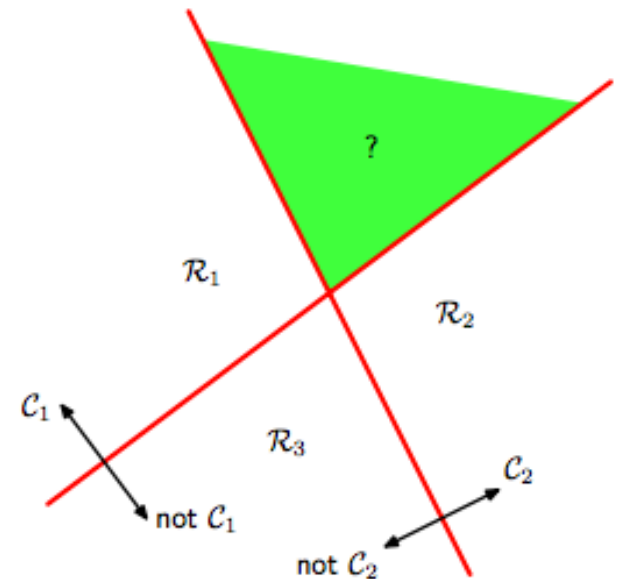
4.1.2 多クラス

1対他分類器

ある特定のクラス c_k に入る点とそのクラスに入らない点とに分類する2クラス問題を解く分類器を $k-1$ 個利用する。

緑の部分は、クラス c_1 とクラス c_2 の両方に所属している。

曖昧な分類領域が出てしまう。



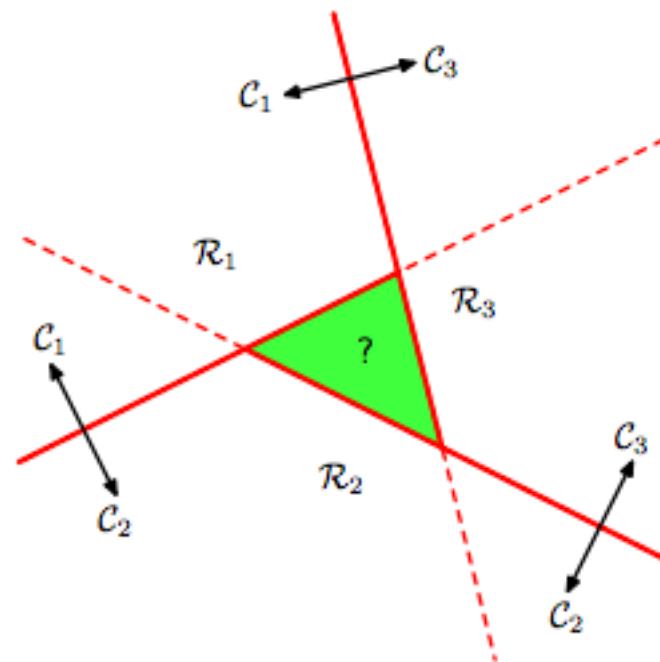
4.1.2 多クラス

1対1分類器

すべての可能なクラスの組の2クラス識別関数を考え、 $K(K-1)/2$ 個の2クラス識別関数を利用する。

緑の部分は、
「クラス C_1 ではなくクラス C_2 」
「クラス C_2 ではなくクラス C_3 」
「クラス C_3 ではなくクラス C_1 」
である。

曖昧な分類領域が出てしまう。



4.1.2 多クラス

K個の識別関数を考える。

$$y_k(\mathbf{x}) = \mathbf{w}_k^T \mathbf{x} + w_{k0}$$

最大の $y_k(x)$ のクラス c_k に割り当てる。

境界は以下の式で定義される(D-1)次元の超平面に相当する。

$$y_k(\mathbf{x}) = y_j(\mathbf{x})$$

$$(\mathbf{w}_k - \mathbf{w}_j)^T \mathbf{x} + (w_{k0} - w_{j0}) = 0.$$

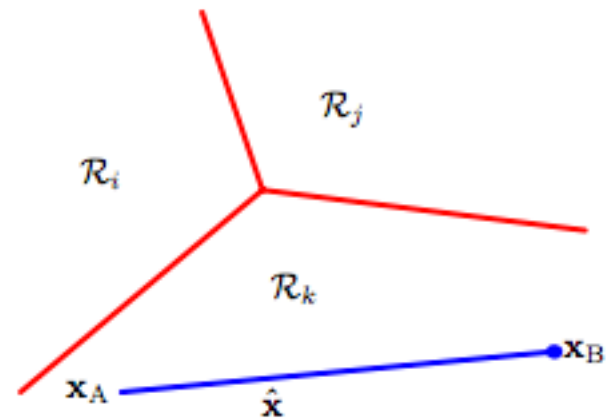
4.1.2 多クラス

凸領域

2点 x_A と x_B が同じ決定領域 R_k にあるとき、
2点 x_A と x_B を結ぶ直線上にある任意の点も
決定領域 R_k にある。

$$y_k(\mathbf{x}) = y_j(\mathbf{x})$$

$$(\mathbf{w}_k - \mathbf{w}_j)^T \mathbf{x} + (w_{k0} - w_{j0}) = 0.$$



凸性の証明

$$\hat{x} = \lambda x_A + (1 - \lambda)x_B \quad 0 \leq \lambda \leq 1$$

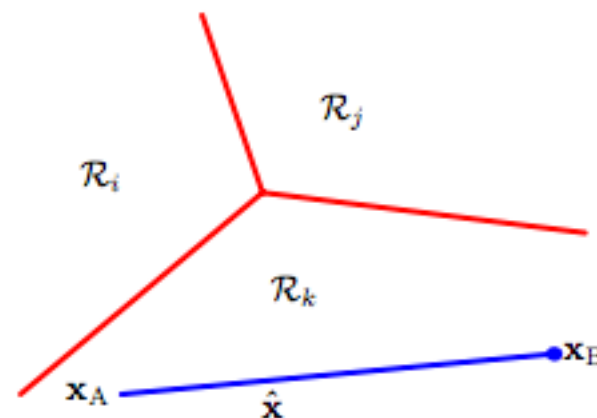
識別関数の線形性より

$$y_k(\hat{\mathbf{x}}) = \lambda y_k(\mathbf{x}_A) + (1 - \lambda)y_k(\mathbf{x}_B)$$

$$y_k(x_B) > y_j(x_B)$$

$$y_k(x_A) > y_j(x_A)$$

$$y_k(\hat{x}) > y_j(\hat{x})$$



よって、2点 x_A と x_B を結ぶ直線上にある任意の点も決定領域 R_k にある。

識別関数のパラメータを学習する方法

$$y_k(\mathbf{x}) = \mathbf{w}_k^T \mathbf{x} + w_{k0}$$

- 最小二乗 4.1.3章
- フィッシャーの線形判別 4.1.4章
- パーセプトロンアルゴリズム 4.1.7章

4.1.3 分類における最小二乗

目的変数ベクトル \mathbf{t} は1-of-K符号化法

$$y_k(\mathbf{x}) = \mathbf{w}_k^T \mathbf{x} + w_{k0}$$

$$y(\mathbf{x}) = \widetilde{\mathbf{W}}^T \widetilde{\mathbf{x}}$$

$$\widetilde{\mathbf{W}} = [\widetilde{\mathbf{w}}_1 \quad \widetilde{\mathbf{w}}_2 \quad \cdots \quad \widetilde{\mathbf{w}}_K] \quad \widetilde{\mathbf{w}}_k = \begin{bmatrix} w_{k0} \\ w_{k1} \\ \cdots \\ w_{kD} \end{bmatrix} \quad \widetilde{\mathbf{x}} = \begin{bmatrix} 1 \\ x_1 \\ \cdots \\ x_D \end{bmatrix}$$

4.1.3 分類における最小二乗

二乗和誤差関数 $E_D(\widetilde{\mathbf{W}}) = \frac{1}{2} \text{Tr} \left\{ (\widetilde{\mathbf{X}}\widetilde{\mathbf{W}} - \mathbf{T})^T (\widetilde{\mathbf{X}}\widetilde{\mathbf{W}} - \mathbf{T}) \right\}$

W の導関数=0の解 $\widetilde{\mathbf{W}} = (\widetilde{\mathbf{X}}^T \widetilde{\mathbf{X}})^{-1} \widetilde{\mathbf{X}}^T \mathbf{T} = \widetilde{\mathbf{X}}^\dagger \mathbf{T}$

識別関数 $\mathbf{y}(\mathbf{x}) = \widetilde{\mathbf{W}}^T \widetilde{\mathbf{x}} = \mathbf{T}^T (\widetilde{\mathbf{X}}^\dagger)^T \widetilde{\mathbf{x}}$.

目的変数ベクトルがある定数 \mathbf{a} と b に対して $\mathbf{a}^T \mathbf{t}_n + b = 0$ を満たすとき、モデルの予測も以下のように同じ制約を満たすことがある。

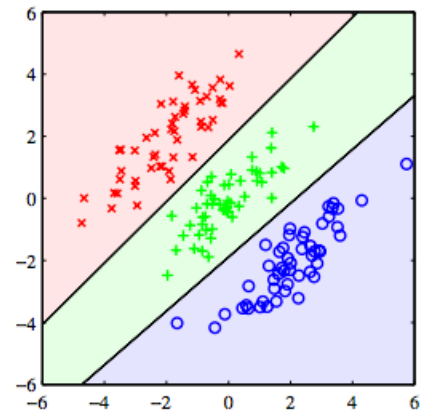
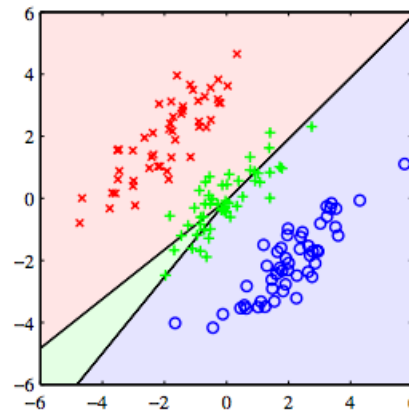
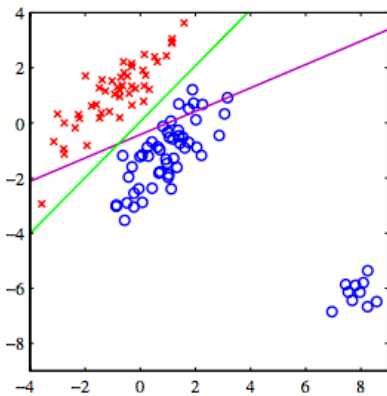
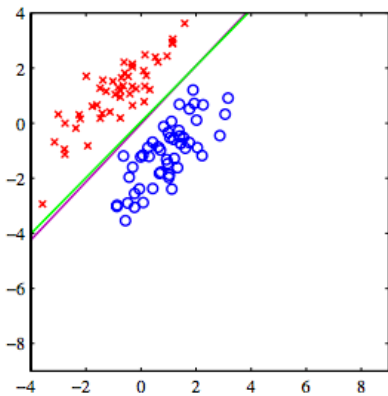
$$\mathbf{a}^T \mathbf{y}(\mathbf{x}) + b = 0.$$

最小二乗法の問題点

外れ値に敏感。頑健性が弱い。

最小二乗法は条件付き確率に
ガウス分布を仮定した場合の最尤法

2値目的変数ベクトルは
ガウス分布からかけ離れている。



4.1.4 フィッシャーの線形判別

2クラス問題について

D次元入力ベクトルを、1次元に射影する。

$$y = \mathbf{w}^T \mathbf{x}$$

2つのクラスの平均ベクトルは

$$\mathbf{m}_1 = \frac{1}{N_1} \sum_{n \in \mathcal{C}_1} \mathbf{x}_n \quad \mathbf{m}_2 = \frac{1}{N_2} \sum_{n \in \mathcal{C}_2} \mathbf{x}_n$$

射影された**クラスの平均の差を最大**にしたい。

$$m_2 - m_1 = \mathbf{w}^T (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)$$

4.1.4 フィッシャーの線形判別

$$\text{最大化 } \mathbf{w}^T (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)$$

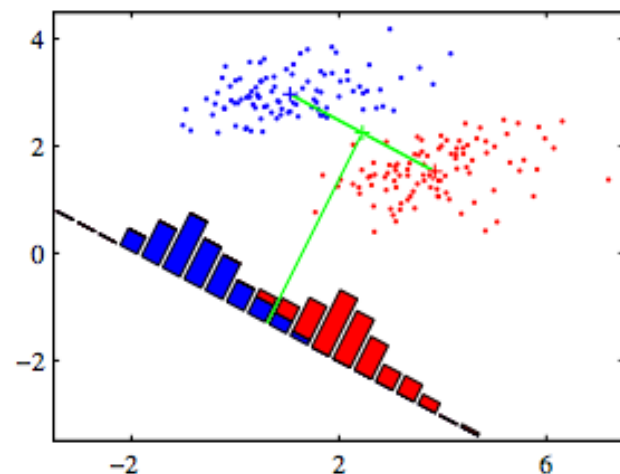
$$\text{制約条件 } \mathbf{w}^T \mathbf{w} = 1$$

ラグランジュの未定乗数法

$$L = \mathbf{w}^T (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1) - \lambda (\mathbf{w}^T \mathbf{w} - 1)$$

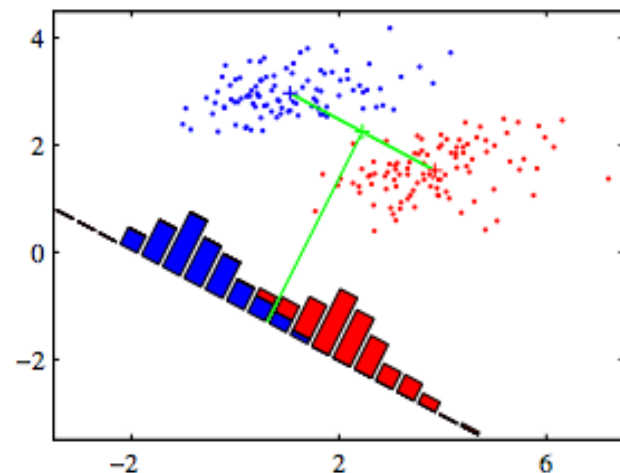
$$\frac{\partial L}{\partial \mathbf{w}} \mathbf{L} = (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1) - 2\lambda \mathbf{w}$$

よって $\mathbf{w} \propto (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)$



4.1.4 フィッシャーの線形判別

クラス平均を結んだ直線上への射影
重なりあう部分が多い。



フィッシャーの方法

射影されたクラス平均間の分離度を大きくすると同時に、各クラス内では小さな分散を与える関数を最大化する。

フィッシャーの判別基準 = クラス間分散 / クラス内分散

4.1.4 フィッシャーの線形判別

クラス内分散は

$$s_1^2 = \sum_{n \in C_1} (y_n - m_1)^2 \quad s_2^2 = \sum_{n \in C_2} (y_n - m_2)^2$$

フィッシャーの判別基準 = クラス間分散 / クラス内分散

$$J(\mathbf{w}) = \frac{(m_2 - m_1)^2}{s_1^2 + s_2^2}$$

4.1.4 フィッシャーの線形判別

フィッシャーの判別基準 = クラス内分散 / クラス間分散

$$J(\mathbf{w}) = \frac{(m_2 - m_1)^2}{s_1^2 + s_2^2} = \frac{\mathbf{w}^T \mathbf{S}_B \mathbf{w}}{\mathbf{w}^T \mathbf{S}_W \mathbf{w}}$$

$$\begin{aligned} (m_2 - m_1)^2 &= \left(\frac{1}{N_1} \sum_{n \in C_1} \mathbf{w}^T \mathbf{x}_n - \frac{1}{N_2} \sum_{n \in C_2} \mathbf{w}^T \mathbf{x}_n \right)^2 & s_1^2 + s_2^2 &= \sum_{n \in C_1} (y_n - m_1)^2 - \sum_{n \in C_2} (y_n - m_2)^2 \\ &= \left(\mathbf{w}^T \left(\frac{1}{N_1} \sum_{n \in C_1} \mathbf{x}_n - \frac{1}{N_2} \sum_{n \in C_2} \mathbf{x}_n \right) \right)^2 & &= \sum_{n \in C_1} (\mathbf{w}^T \mathbf{x}_n - \mathbf{w}^T \mathbf{m}_1)^2 - \sum_{n \in C_2} (\mathbf{w}^T \mathbf{x}_n - \mathbf{w}^T \mathbf{m}_2)^2 \\ &= (\mathbf{w}^T (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1))^2 & &= \mathbf{w}^T \mathbf{S}_W \mathbf{w} \\ &= \mathbf{w}^T (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1) (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)^T \mathbf{w} \\ &= \mathbf{w}^T \mathbf{S}_B \mathbf{w} \end{aligned}$$
$$\mathbf{S}_B = (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1) (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)^T \quad \mathbf{S}_W = \sum_{n \in C_1} (\mathbf{x}_n - \mathbf{m}_1) (\mathbf{x}_n - \mathbf{m}_1)^T + \sum_{n \in C_2} (\mathbf{x}_n - \mathbf{m}_2) (\mathbf{x}_n - \mathbf{m}_2)^T$$

クラス間共分散行列

総クラス内共分散行列

4.1.4 フィッシャーの線形判別

$$\text{最大化} \quad J(\mathbf{w}) = \frac{\mathbf{w}^T \mathbf{S}_B \mathbf{w}}{\mathbf{w}^T \mathbf{S}_W \mathbf{w}}$$

$$\frac{\partial}{\partial \mathbf{w}} J(\mathbf{w}) = \frac{(\mathbf{w}^T \mathbf{S}_B \mathbf{w})' (\mathbf{w}^T \mathbf{S}_W \mathbf{w}) - (\mathbf{w}^T \mathbf{S}_B \mathbf{w}) (\mathbf{w}^T \mathbf{S}_W \mathbf{w})'}{(\mathbf{w}^T \mathbf{S}_W \mathbf{w})^2}$$

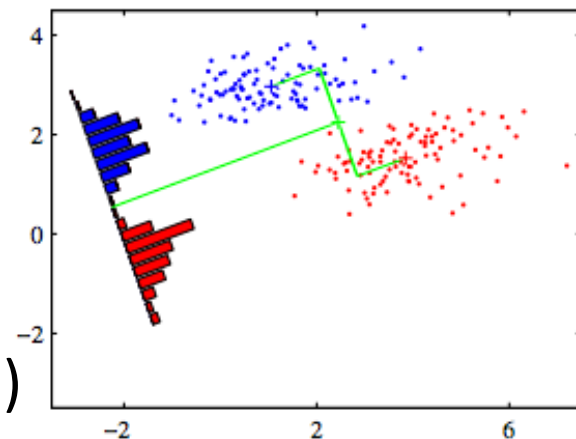
$$2\mathbf{S}_B \mathbf{w} (\mathbf{w}^T \mathbf{S}_W \mathbf{w}) = (\mathbf{w}^T \mathbf{S}_B \mathbf{w}) 2\mathbf{S}_W \mathbf{w}$$

$$(\mathbf{w}^T \mathbf{S}_W \mathbf{w}) \mathbf{S}_B \mathbf{w} = (\mathbf{w}^T \mathbf{S}_B \mathbf{w}) \mathbf{S}_W \mathbf{w}$$

$$\mathbf{S}_W \mathbf{w} \propto \mathbf{S}_B \mathbf{w} = (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)(\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)^T \mathbf{w} \propto (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)$$

$$\mathbf{w} \propto \mathbf{S}_W^{-1} (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)$$

$$\begin{aligned} \text{※} \quad \frac{\partial}{\partial \vec{x}} (\vec{x}^T \mathbf{A} \vec{x}) &= (\mathbf{A} + \mathbf{A}^T) \vec{x} \\ &= 2\mathbf{A} \vec{x} \quad (\mathbf{A} \text{が対称行列}) \end{aligned}$$



4.1.5 最小二乗との関連

最小二乗法

目的変数値の集合にできるだけ近い予測をすることを目的

フィッシャーの判別基準

出力空間でのクラス分類を最大にする

2クラス問題において、フィッシャーの判別基準は最小二乗の特殊な場合である。

4.1.5 最小二乗との関連

クラス C_1 に対する目的変数値を N/N_1
クラス C_2 に対する目的変数値を $-N/N_2$ とする。

N_1 はクラス C_1 に属するパターンの個数

N_2 はクラス C_2 に属するパターンの個数

二乗和誤差関数
$$E = \frac{1}{2} \sum_{n=1}^N (\mathbf{w}^T \mathbf{x}_n + w_0 - t_n)^2$$

w_0 の導関数
$$\sum_{n=1}^N (\mathbf{w}^T \mathbf{x}_n + w_0 - t_n) = 0 \quad \left(\mathbf{S}_W + \frac{N_1 N_2}{N} \mathbf{S}_B \right) \mathbf{w} = N(\mathbf{m}_1 - \mathbf{m}_2)$$

w の導関数
$$\sum_{n=1}^N (\mathbf{w}^T \mathbf{x}_n + w_0 - t_n) \mathbf{x}_n = 0 \quad \mathbf{w} \propto \mathbf{S}_W^{-1} (\mathbf{m}_2 - \mathbf{m}_1)$$

フィッシャーの線形判別と同じ

4.1.6 多クラスにおけるフィッシャーの判別

入力空間の次元はD

線形特徴を導入する。 $k=1, \dots, D'$ $y_k = \mathbf{w}_k^T \mathbf{x}$,

グループ化してベクトル \mathbf{y} で表現する。

重みベクトル $\{\mathbf{w}_k\}$ を列とする行列 \mathbf{W} を考える

$$\mathbf{y} = \mathbf{W}^T \mathbf{x}$$

DからD'に射影する

4.1.6 多クラスにおけるフィッシャーの判別

クラス内共分散

$$\mathbf{S}_W = \sum_{k=1}^K \mathbf{S}_k$$
$$\mathbf{S}_k = \sum_{n \in \mathcal{C}_k} (\mathbf{x}_n - \mathbf{m}_k)(\mathbf{x}_n - \mathbf{m}_k)^T$$
$$\mathbf{m}_k = \frac{1}{N_k} \sum_{n \in \mathcal{C}_k} \mathbf{x}_n$$

総共分散行列

$$\mathbf{S}_T = \sum_{n=1}^N (\mathbf{x}_n - \mathbf{m})(\mathbf{x}_n - \mathbf{m})^T$$
$$\mathbf{m} = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N \mathbf{x}_n = \frac{1}{N} \sum_{k=1}^K N_k \mathbf{m}_k$$

クラス間共分散行列の測度と考えられる行列

$$\mathbf{S}_B = \sum_{k=1}^K N_k (\mathbf{m}_k - \mathbf{m})(\mathbf{m}_k - \mathbf{m})^T$$

総共分散行列

$$\mathbf{S}_T = \mathbf{S}_W + \mathbf{S}_B$$

4.1.6 多クラスにおけるフィッシャーの判別

射影後

クラス内共分散 $\mathbf{s}_W = \sum_{k=1}^K \sum_{n \in \mathcal{C}_k} (\mathbf{y}_n - \boldsymbol{\mu}_k)(\mathbf{y}_n - \boldsymbol{\mu}_k)^T$ $\boldsymbol{\mu}_k = \frac{1}{N_k} \sum_{n \in \mathcal{C}_k} \mathbf{y}_n$

クラス間共分散行列の測度と考えられる行列

$$\mathbf{s}_B = \sum_{k=1}^K N_k (\boldsymbol{\mu}_k - \boldsymbol{\mu})(\boldsymbol{\mu}_k - \boldsymbol{\mu})^T$$
$$\boldsymbol{\mu} = \frac{1}{N} \sum_{k=1}^K N_k \boldsymbol{\mu}_k$$

Fukunaga, 1990

クラス間共分散が大きく、クラス内共分散が小さい場合に、大きくなるスカラーを構成。

$$J(\mathbf{W}) = \text{Tr} \{ \mathbf{s}_W^{-1} \mathbf{s}_B \}$$

$$J(\mathbf{w}) = \text{Tr} \{ (\mathbf{W} \mathbf{s}_W \mathbf{W}^T)^{-1} (\mathbf{W} \mathbf{s}_B \mathbf{W}^T) \}$$

\mathbf{s}_B のランクは高々 $(K-1)$ である。 $(K-1)$ 個以上の線形「特徴」を発見することができない。

4.1.7 パーセプトロンアルゴリズム

入力ベクトル \mathbf{x} を特徴ベクトル $\phi(\mathbf{x})$ に変換する。

一般化線形モデル $y(\mathbf{x}) = f(\mathbf{w}^T \phi(\mathbf{x}))$

非線形活性化関数 $f()$ はステップ関数 $f(a) = \begin{cases} +1, & a \geq 0 \\ -1, & a < 0 \end{cases}$

目的変数値 $t \in \{-1, 1\}$

$\mathbf{w}^T \phi(\mathbf{x}_n) > 0$ なら C_1

$\mathbf{w}^T \phi(\mathbf{x}_n) < 0$ なら C_2

すべてのパターンは $\mathbf{w}^T \phi(\mathbf{x}_n) t_n > 0$ を満たす。

4.1.7 パーセプトロンアルゴリズム

パーセプトロン基準

正しく分類された任意のパターンに対しては誤差0

誤分類された任意のパターンに対しては $-\mathbf{w}^T \phi(\mathbf{x}_n)t_n$

$$E_P(\mathbf{w}) = - \sum_{n \in \mathcal{M}} \mathbf{w}^T \phi_n t_n$$

確率的最急降下アルゴリズム

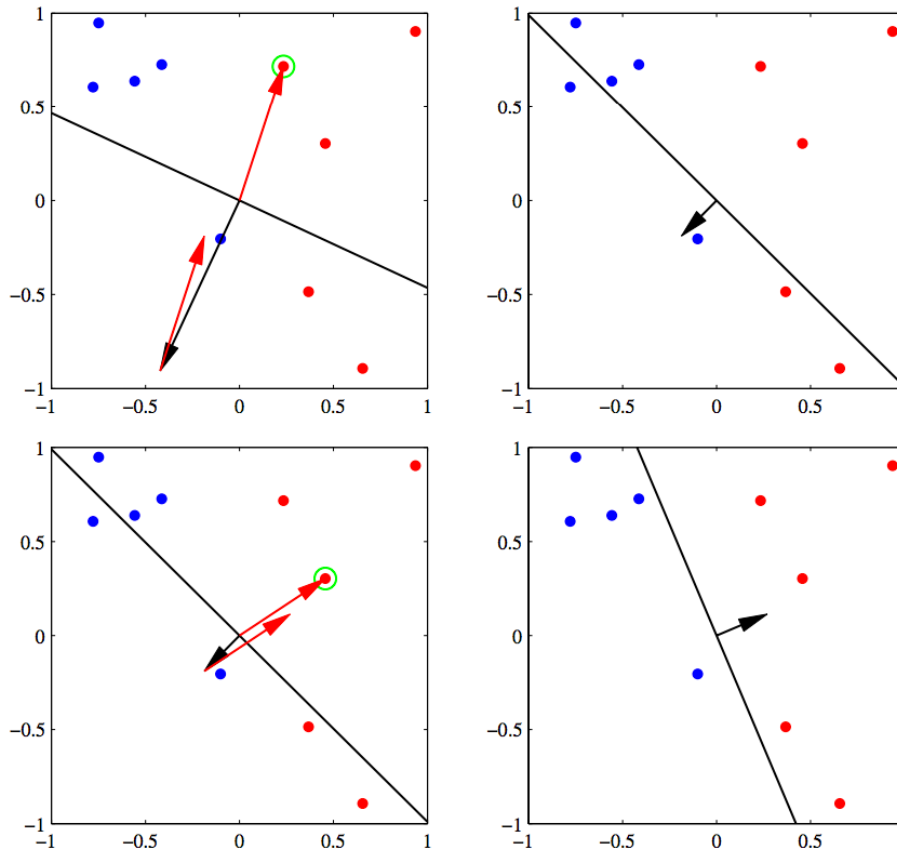
$$\mathbf{w}^{(\tau+1)} = \mathbf{w}^{(\tau)} - \eta \nabla E_P(\mathbf{w}) = \mathbf{w}^{(\tau)} + \eta \phi_n t_n$$

パターンが正しく分類されている場合には、重みベクトルに手を加えず、パターンが誤って分類された場合、誤分類されたパターンが c_1 の場合には、 ϕ_n を加え誤分類されたパターンが c_2 の場合には、 ϕ_n を引く

4.1.7 パーセプトロンアルゴリズム

確率的最急降下アルゴリズム

$$\mathbf{w}^{(\tau+1)} = \mathbf{w}^{(\tau)} - \eta \nabla E_P(\mathbf{w}) = \mathbf{w}^{(\tau)} + \eta \phi_n t_n$$



4.1.7 パーセプトロンアルゴリズム

- 一回の更新で、誤分類されたパターンの誤差は減少できる
- 一回の更新で、新たな誤差が生じることも
- 一回の更新で、総誤差関数を減少させることを保証していない

パーセプトロンの収束定理

線形分離が可能な場合、パーセプトロン学習アルゴリズムは有限回の繰り返しで厳密解に収束することを保証している。

収束するのに必要な繰り返し回数がかなり多い

初期値やデータの提示順に依存して様々な解に収束してしまう

4.2 確率的生成モデル

クラスの条件付き確率密度 $p(x|C_k)$ と
クラスの事前確率 $p(C_k)$ をモデル化して、
ベイズの定理より、
事後確率 $p(C_k|x)$ を計算する。

4.2 確率的生成モデル

2クラスの場合

$$\begin{aligned} p(C_1|\mathbf{x}) &= \frac{p(\mathbf{x}|C_1)p(C_1)}{p(\mathbf{x}|C_1)p(C_1) + p(\mathbf{x}|C_2)p(C_2)} \\ &= \frac{1}{1 + \frac{p(\mathbf{x}|C_2)p(C_2)}{p(\mathbf{x}|C_1)p(C_1)}} \\ &= \frac{1}{1 + \exp(-a)} = \sigma(a) \end{aligned}$$

$$a = \ln \frac{p(\mathbf{x}|C_1)p(C_1)}{p(\mathbf{x}|C_2)p(C_2)}$$

ロジスティックシグモイド関数

$$\sigma(a) = \frac{1}{1 + \exp(-a)}$$

4.2 確率的生成モデル

多クラスの場合

正規化指数関数(ソフトマックス関数)

すべての $j \neq k$ に対して、 $a_k \gg a_j$ である場合には、 $p(C_k | \mathbf{x}) \approx 1$, $p(C_j | \mathbf{x}) \approx 0$ となる。

$$\begin{aligned} p(C_k | \mathbf{x}) &= \frac{p(\mathbf{x} | C_k) p(C_k)}{\sum_j p(\mathbf{x} | C_j) p(C_j)} \\ &= \frac{\exp(a_k)}{\sum_j \exp(a_j)} \end{aligned}$$

$$a_k = \ln p(\mathbf{x} | C_k) p(C_k)$$

4.2.1 連続値入力

仮定

クラスの条件付き確率密度がガウス分布

すべてのクラスが同じ共分散行列を共有する

クラス C_k の確率密度

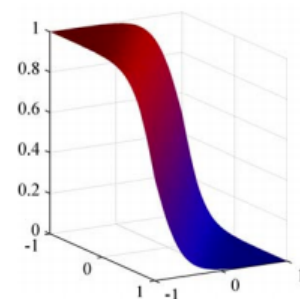
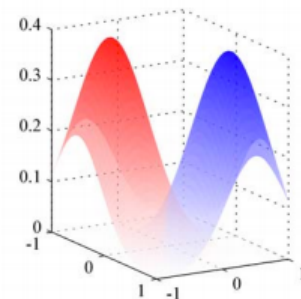
$$p(\mathbf{x}|C_k) = \frac{1}{(2\pi)^{D/2}} \frac{1}{|\Sigma|^{1/2}} \exp \left\{ -\frac{1}{2}(\mathbf{x} - \mu_k)^T \Sigma^{-1}(\mathbf{x} - \mu_k) \right\}$$

クラス C_1 の事後確率

$$p(C_1|\mathbf{x}) = \sigma(\mathbf{w}^T \mathbf{x} + w_0)$$

$$\mathbf{w} = \Sigma^{-1}(\mu_1 - \mu_2)$$

$$w_0 = -\frac{1}{2}\mu_1^T \Sigma^{-1} \mu_1 + \frac{1}{2}\mu_2^T \Sigma^{-1} \mu_2 + \ln \frac{p(C_1)}{p(C_2)}$$



4.2 確率的生成モデル

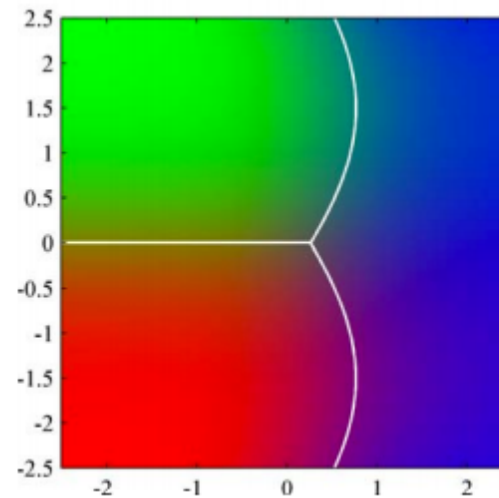
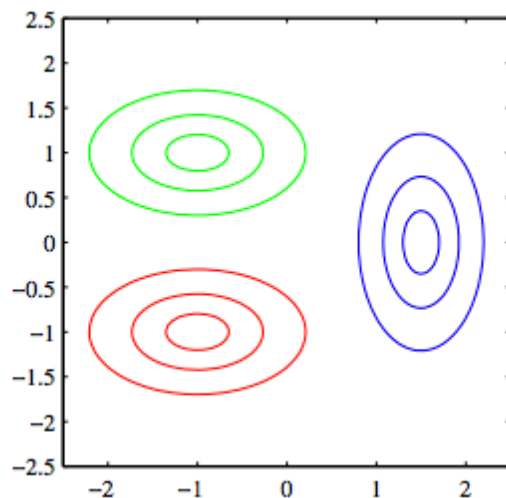
Kクラス分類

共分散を共有 → 2次の項がキャンセル

一般化線形モデル

$$a_k(\mathbf{x}) = \mathbf{w}_k^T \mathbf{x} + w_{k0}$$

$$\begin{aligned} \mathbf{w}_k &= \Sigma^{-1} \boldsymbol{\mu}_k \\ w_{k0} &= -\frac{1}{2} \boldsymbol{\mu}_k^T \Sigma^{-1} \boldsymbol{\mu}_k + \ln p(C_k) \end{aligned}$$



4.2.2 最尤解

クラスの条件付き確率密度 $p(x|C_k)$ に対するパラメトリックな関数形を決める。

クラスの事前確率 $p(C_k)$ と、パラメータの値を**最尤法**で求める。

x の観測値とそれに対応するクラスラベルで構成する学習データ集合が必要

4.2.2 最尤解

仮定

条件付き確率密度がガウス分布、共通の共分散行列を持つ

データ集合 $\{\mathbf{x}_n, t_n\} \quad t \in \{0, 1\}$

$t=1$ はクラス C_1 を表し、 $t=0$ はクラス C_2 を表す。

クラスの事前確率 $p(C_1)=\pi$, $p(C_2)=1-\pi$

$$p(\mathbf{x}_n, C_1) = p(C_1)p(\mathbf{x}_n|C_1) = \pi \mathcal{N}(\mathbf{x}_n|\boldsymbol{\mu}_1, \boldsymbol{\Sigma})$$

$$p(\mathbf{x}_n, C_2) = p(C_2)p(\mathbf{x}_n|C_2) = (1 - \pi) \mathcal{N}(\mathbf{x}_n|\boldsymbol{\mu}_2, \boldsymbol{\Sigma})$$

尤度関数

$$p(\mathbf{t}|\pi, \boldsymbol{\mu}_1, \boldsymbol{\mu}_2, \boldsymbol{\Sigma}) = \prod_{n=1}^N [\pi \mathcal{N}(\mathbf{x}_n|\boldsymbol{\mu}_1, \boldsymbol{\Sigma})]^{t_n} [(1 - \pi) \mathcal{N}(\mathbf{x}_n|\boldsymbol{\mu}_2, \boldsymbol{\Sigma})]^{1-t_n}$$

4.2.2 最尤解

π に関する対数尤度の項
$$\sum_{n=1}^N \{t_n \ln \pi + (1 - t_n) \ln(1 - \pi)\}$$

π に関する最尤推定
$$\pi = \frac{1}{N} \sum_{n=1}^N t_n = \frac{N_1}{N} = \frac{N_1}{N_1 + N_2}$$

μ_1 に関する対数尤度の項

$$\sum_{n=1}^N t_n \ln \mathcal{N}(\mathbf{x}_n | \boldsymbol{\mu}_1, \boldsymbol{\Sigma}) = -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N t_n (\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_1)^\top \boldsymbol{\Sigma}^{-1} (\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_1) + \text{const.}$$

μ_1 に関する最尤推定
$$\boldsymbol{\mu}_1 = \frac{1}{N_1} \sum_{n=1}^N t_n \mathbf{x}_n$$

μ_2 に関する最尤推定
$$\boldsymbol{\mu}_2 = \frac{1}{N_2} \sum_{n=1}^N (1 - t_n) \mathbf{x}_n$$

4.2.2 最尤解

Σ に関する対数尤度の項

$$\begin{aligned} & -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N t_n \ln |\Sigma| - \frac{1}{2} \sum_{n=1}^N t_n (\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_1)^T \Sigma^{-1} (\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_1) \\ & -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N (1 - t_n) \ln |\Sigma| - \frac{1}{2} \sum_{n=1}^N (1 - t_n) (\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_2)^T \Sigma^{-1} (\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_2) \\ & = -\frac{N}{2} \ln |\Sigma| - \frac{N}{2} \text{Tr} \{ \Sigma^{-1} \mathbf{S} \} \end{aligned}$$

微分すると

$$-\frac{N}{2} (\Sigma^{-1})^T + \frac{N}{2} (\Sigma^{-1} \mathbf{S} \Sigma^{-1})^T = 0$$

よって、 $\Sigma = \mathbf{S}$ となる

$$\mathbf{S} = \frac{N_1}{N} \mathbf{S}_1 + \frac{N_2}{N} \mathbf{S}_2$$

$$\mathbf{S}_1 = \frac{1}{N_1} \sum_{n \in \mathcal{C}_1} (\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_1)(\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_1)^T$$

$$\mathbf{S}_2 = \frac{1}{N_2} \sum_{n \in \mathcal{C}_2} (\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_2)(\mathbf{x}_n - \boldsymbol{\mu}_2)^T$$

※ $\frac{\partial}{\partial A} \log |A| = (A^{-1})^T \quad \frac{\partial}{\partial A} \text{tr}(A^{-1}B) = -(A^{-1}BA^{-1})^T$

4.2.3 離散特徴

特徴が離散値 x_i の場合を考える。 $x_i \in \{0, 1\}$

特徴数 D 個の入力がある場合、一般的な分布は各クラスに対する 2^D 個の要素の表に相当する。

ナイーブベイズを仮定。特徴値がクラス C_k に対して条件付き独立であるとして扱われる。

$$p(\mathbf{x}|C_k) = \prod_{i=1}^D \mu_{ki}^{x_i} (1 - \mu_{ki})^{1-x_i}$$

$$a_k = \ln p(\mathbf{x}|C_k)p(C_k).$$

$$a_k(\mathbf{x}) = \sum_{i=1}^D \{x_i \ln \mu_{ki} + (1 - x_i) \ln(1 - \mu_{ki})\} + \ln p(C_k)$$

入力値 x_i の線形関数

4.2.3 指数型分布族

ガウス分布と離散値入力のとき、クラスの事後確率は一般線形化モデルとなる。

クラスの条件付き確率密度 $p(x|C_k)$ が指数型分布族であるなら、クラスの事後確率は一般線形モデルとなる。

指数型分布族

$$p(\mathbf{x}|\boldsymbol{\lambda}_k) = h(\mathbf{x})g(\boldsymbol{\lambda}_k) \exp \{ \boldsymbol{\lambda}_k^T \mathbf{u}(\mathbf{x}) \}$$

$u(x)=x$ となるような分布の部分クラスに注目し、尺度パラメータ s を導入する。

$$p(\mathbf{x}|\boldsymbol{\lambda}_k, s) = \frac{1}{s} h \left(\frac{1}{s} \mathbf{x} \right) g(\boldsymbol{\lambda}_k) \exp \left\{ \frac{1}{s} \boldsymbol{\lambda}_k^T \mathbf{x} \right\}$$

4.2.3 指数型分布族

クラスの事後確率が \mathbf{x} の線形関数 $a(\mathbf{x})$ のロジスティックシグモイド関数によって、以下の式のようにになる。

2クラス

$$a(\mathbf{x}) = (\boldsymbol{\lambda}_1 - \boldsymbol{\lambda}_2)^T \mathbf{x} + \ln g(\boldsymbol{\lambda}_1) - \ln g(\boldsymbol{\lambda}_2) + \ln p(\mathcal{C}_1) - \ln p(\mathcal{C}_2)$$

Kクラス

$$a_k(\mathbf{x}) = \boldsymbol{\lambda}_k^T \mathbf{x} + \ln g(\boldsymbol{\lambda}_k) + \ln p(\mathcal{C}_k)$$

\mathbf{x} の線形関数